反逆のイザベラ 第二部開戦前夜

ヘルナイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

反逆のイザベラ　第二部開戦前夜

【Ｎコード】

Ｎ１９７１Ｈ

【作者名】

ヘルナイト

【あらすじ】

ロンダリオ商会の協力を得たイザベラは、軍備を整えクーデターのタイミングを計っていた。しかし、ハルケギニアには戦乱の足音が近づいて来ていた。

第一話　竜の羽衣

ロンダリオの協力を取り付けられた事は、大きな意味があった。

ロンダリオが商会への委託生産を提案した。

現在の工場を商会に売り渡してイザベラが生産された武器弾薬を買い取る事になる。

当初ユウは、防諜面から反対したがイザベラが認めた事と、ロンダリオがライセンス料として二万エキューを支払った為結局生産は、商会に委託された。

ロンダリオが帰り、イザベラと二人になったユウは、イザベラに問いた。

「よろしいのですか？」

「ユウ、貴方が言いたい事はわかるわ。けど、信用を得るには、まず相手を信用しないと」

「…承知しました」

この時、ユウはイザベラに独占欲を感じロンダリオに少し嫉妬していた。

それが、忠誠心か恋心かはまだ本人は、わかっていなかったが…

実際にロンダリオは、優秀だった。工場の生産もより効率的になり、

これまで開発しなかったカノン砲の開発にも成功した。

そして、ユウが異世界から来た事を知らされてからは、商会を情報網を使い積極的に異世界の武器の収集にのりだした。

これにより、ＭＰ４０やワルサーそして、タイガー戦車が見つかった。

どれも固定化がかけられており、使用できる状態だった。

とらあえず戦車は保管して、ＭＰ４０とワルサーが１００式短機関銃を抑え正式採用される。

拳銃弾の生産ラインは、８ミリから９ミリに変更された。

そしてある日、ロンダリオが情報を持ってきた。

「タルブと言う村に異世界の品が有るそうです」

「タルブ？あぁワインのね」

「えぇ」

「それで、交渉は？」

「それが、遺言で墓碑銘が読める者しか渡さないそうです」

「成る程ね、ユウ支度して！タルブ村にいくわよ！」

と言いつつ自分も支度を始めるイザベラ

「っな！イザベラ様が行かなくてもよろしいのでは？」

ロンダリオが驚いているが、ワーレンはため息をつきユウはワーレンに同情した。

「なんで急に？俺が行けばいいだろう？」

「来週、シャルロットの使い魔召喚があるのよ」

「…いいのかそれで？」

「七号の監視とトリスティインの教育水準の調査の名目で！」

「…はぁ」

イザベラは、たまに子供ぽくなる。ユウは市場の調査や平民の生活水準の調査名目で連れ回されている。

当然皺寄せは、ワーレンにいく。

彼に安息の日々は、来るのだろうか？

何しろ、［イザベラ様が風邪を引くと文官も風邪を引く］とサンゴンでいわれているぐらい、イザベラの事務処理能力は高い。

イザベラ様が出掛けると知り、文官達の表情は暗い。

タルブの村

「へぇ綺麗な所ね」

タルブは、ワインが特産品の寒村で、ここも防衛戦略で街道が整備されていない。

「確かに、綺麗ですが目的忘れてません？」

「わ、忘れてなんかないわよ！」

（…はぁ、忘れてたな。何なんだろう？このドキドキは？）

（この丘で夕日を見ながらなんて、ロマンチックよねぇ～…はぁ）

始めて自分を認めてくれたユウに対するイザベラの思い。

イザベラに対する思いを忠誠心と勘違いしているユウ。

二人の仲は、発展するのだろうか？

タルブ村では、ガリアの王族がわざわざワインを買い付け来たと大騒ぎである。

「わざわざ、王族の方がありがとうございます」

「ワインもですが、竜の羽衣を見せていただけません？」

「竜の羽衣ですか？構いませんよ。どうぞ、こちらになります」

洞窟を抜けた森の中、神社らしき建物の中にそれはあった。

「間違いないゼロ戦だ！」

「へぇ～、これがねぇ」

イザベラは、ユウから近代戦史を聞いていたのでゼロ戦の活躍も聞いていた。

「竜の羽衣をしっているのですか？」

「あぁ、これは竜の羽衣なんかじゃない。零式艦上戦闘機、帝国海軍の誇った傑作機だ。」

「？？。では、これも読めるのですか？」

案内して来た男は、墓を見せる。

「海軍少尉、佐々木武雄異界に眠る」

驚いている男にイザベラが声をかける。

「竜の羽衣を譲って戴けませんか？」

「もちろんです。祖父の遺言ですから。」

「金額は…」

「いいですよ。祖父の遺言ですから」

「では、代わりにワインを買って行きましょう」

「ありがとうございます」

護衛に付いて来た竜騎士は、ゼロ戦をサンゴンに運んでいった。

護衛はユウとルッツだけであるが、いつもの事である。

「さぁ、用事も済んだし観光といくわよ」

「いいのか、これで？」

「さぁ？取りあえず、ワーレン卿と文官達が心配です」

その頃、商会の進出や建設の申請でサンゴン村の文官は絶望的な量の書類に埋もれていた。

第二話　魔法学院（前書き）

ラ・シュールとトリスタニアの観光を経て魔法学院に向かった。イザベラは、使い魔召喚の儀式に立ち会う。

この作品は、アンチルイズです。

第二話　魔法学院

イザベラはラ・シュールとトリスタニアを観光した後、シャルロットのいるトリステイン魔法学院に向かった。

魔法学園に向かう馬車の中

「ユウ、リュティミスや、トリスタニアみてどう思う？」

「都市としての機能が低いかな？後は、平民街は不衛生すぎる」

「そう。もう、城塞都市は時代おくれよね」

ハルケギニアの都市の下水道は貴族街はともかく平民街には整備されていない。

城塞都市は、路地が迷路のように入り組んでいて大通りも狭く都市としての機能が低い。

「ガリアは単なる先進国ではなく、新しい文化の中心として発展するべきなのよ。その為にユウのいた地球のように近代的な都市を造りたいの」

「その構想の為にはまずは、権力の掌握をしなければなりませんな」

「準備は、進んでいるのよ。問題は、タイミングよ」

これからの計画の打ち合わせや、新体制の構想・地球の話しをして

いると魔法学院に到着した。開発の話しをしている内に、魔法学院に到着した。

王宮には、シャルロットの監視の名目で、トリステインには名門のトリステイン魔法学院の使い魔召喚の儀式を見学したいと許可を申請していた。

そして、今日の夜に召喚の儀式が行われる。

「シャルロットと呼ばないように」

「わかっているわ」

馬車から降りると、教師や生徒が整列しイザベラを歓迎していた。

イザベラは、学院長室でオスマンに挨拶を済ませて、数日の授業の見学と案内役にタバサを指名して許可をオスマンから貰った。

案内された部屋に荷物を置きイザベラは夜の使い魔召喚の儀式まで学院を見学した。

「さすがは、名門といったものね」

「設備は、中々ですが問題は教員の質ですよ」

「シャ…タバサ、どんな教員がいるのかしら？」

「…普通。でも、一人面白いのがいる」

「それは？」

「…コルベール先生」

「そうですか」

見学を終え部屋に戻るとイザベラは、息をつく。

「はぁ～、堅苦しいたらありゃしない」

「イメージは大切ですから」

「だから、こうやってお嬢様をやってるんじゃない」

イザベラは、本来活発の方で行動はあまりお姫様ぽくない。

「しかし、シャルロット様は何を召喚するんでしょうね？」

「さぁ～ね、シャルロットは才能があるから、マンティコアやドラゴンみたいな大物を召喚するんじゃない？」

「あの歳で、トライアングルですからね」

「それは、未だにドットの私に対する嫌味のつもりかい？」

「い、いえ決してそんなつもりは…」

「っふん」

ユウを召喚したことで魔法への関心は減ったものの、イザベラはシャルロットに多少のコンプレックスを感じていた。

そして夜、学院近くの平原でコルベール監督の元で、使い魔召喚が行われた。

イザベラは、離れたところで見学していた。

「流石シャルロットね。一発で成功、しかも風竜なんて」

「イザベラ様、誰が聞いているかわかりません」

「わっかてるわよ」

そして、最後にやたら五月蝿い音をたてている者がいる。

「昔の父上みたい…」

「しかし、あの威力下手な攻撃魔法より強力なんでは？」

「えぇ」

周りが冷やかす中やっと召喚に成功し、現れたのは人間だった。

「まさか？！」

「どうしたの？」

「地球いた時の知り合いです」

「じゃあ、彼女は担い手？」

「可能性大かと」

「彼女の事を調べてみる必要があるわね」

「はい」

契約が済み皆が引き揚げる中イザベラとユウは、残った。

ユウは、サイトに話し掛ける事悩んでいた。

「ねぇちょっといいかしら？」

「なによ！！…す、すいません、イザベラ様とは知らずに」

「別に構わないわよ」

「っあ！先輩！」

「何してるのよ！王族の前よ！」

サイトに蹴りを入れるのを見て、イザベラはこの少女に嫌悪感を覚えた。

「貴女名前は？」

「は、はい！ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです」

「っそ。もういいわ、ありがとう」

「いえ！こちらも使い魔が失礼をしまして、申し訳ありません」

と言いつつサイトを殴るのを見て、イザベラはルイズに見切りを付けた。

「あのルイズとか言う人は駄目ね」

「仕方ないでしょう。此処はそういう所です」

「貴方が、もしあの少女に召喚されたらどうする？」

「待遇はどうあれ、仕えるしか生きる道はありませんからね」

「…そう」

（ユウは、私をどう思ってるのかしら？私に仕えるのは生きるため？）

このイザベラの心配が二人の関係に変化をもたらすとは、イザベラは勿論ユウにもわかるはずが無かった。

第三話　魔法学院にて

次の日、朝食を終えイザベラが部屋に帰ってくると機嫌がわるかった。

ユウとルッツは、イザベラが滞在する部屋の掃除をしていた。

使用人の使用をユウが迷惑をかけたくないと言った為であるが、防諜上の問題である。

「どうしたんです？」

「昨日のあの女、食堂の床で食べさせようとしたのよ」

「趣味が悪いですね。立場を解らせようとしたのでは？」

「使い魔は、パートナーよ！それをあんな扱い！あれは、私が嫌った古い貴族そのものだわ！」

（俺は、イザベラに召喚されてよかったなぁ。サイト同情はするぞ！）

ユウの心の援護射撃は、当然サイトに届く事はなかった。

「ヴァリエール家については、サイゴンに伝令のガーゴイルを飛ばしたので本国の情報待ちです」

「それよりも、イザベラ様。今日の授業は、あのコルベールですよ」

「そうね。ユウは、一緒に来なさい。ルッツは部屋で休んでいいわ」

「「了解です」」

教室に入ると、シャルロットの隣にイザベラが座りユウは隣に立つ。

「イザベラ王女様？」

「何ですか？」

「覚えていらっしゃります？ツェルプストーですわ」

「え～と。何年か前に遊園会でお会いしましたわね？」

「噂は、常々聞いておりますわ」

「そうですか…」

すると、ルイズとサイトがやってきた。サイトがユウに話し掛けようとして殴られる。

（頼むから学習しろよ！相変わらず天然たな）

コルベールが教室に入り授業が始まった。

「皆さん！この愉快な蛇君を見て下さい！」

「何あれ？」

「さぁ？愉快な蛇君ってネーミングが…」

イザベラとユウがヒソヒソと話しているとコルベールは、魔法で火を起こして動かし始めた。

「ねぇ、あれって？」

「間違いない！エンジンです」

「なら、戦車やゼロ戦も作れるの？」

「可能性はあるかと。しかし、彼のような者が国外に居るのは危険かと」

「彼の事を調べて。徹底的に」

「了解です」

皆は興味なさそうしていた所にサイトが立ち上がりエンジンの事を言う。

ルイズがサイトを殴り、その後爆発で授業は、中止になった。

昼休みコルベールの研究室の前

「ちょっと宜しいですか？」

「はい？何でしょうかイザベラ様？」

「私は、貴方の発明した愉快な蛇君でしたか？」

「えぇ」

「あれに非常に興味があります。我が国で研究・開発なさる気はありませんか？」

「っえ？」

「優秀なスッタフに十分な資金を提供いたしますわ」

「貴方の研究の価値を真に理解する所で働きませんか」

ユウも、イザベラに続き勧誘するがコルベールは

「私は教師に誇りをもっています。…残念ながらお断りさせていただきます」

「そうですか。しかし、私は簡単に諦めませんわよ」

そう言うと、イザベラ達は去って行った。

「空振りでしたね」

「いいえ。ここであっさり寝返る様では信用できないわ」

「しかし、あの手のタイプは厄介ですよ」

「そのうちに何とかするわ」
中庭に差し掛かると何やら野次馬ができている。
近くにいるキュルケに聞くと、サイトが決闘するそうだ。
「彼の能力を見るいい機会だわ」
「ルーンは左手、ガンダールヴです」
「それが？」
「サイトは、武器を持っていません」

ヴェストリの広場は既に野次馬が出来ていた。
「暇人ね貴族は」
「娯楽が少ないですからね、此処は」
「趣味が悪いわ！ノブリス・オブリージュを忘れた者は」
ノブリス・オブリージュ
高貴なる者の責任
イザベラは、強者には弱者を守る責任があり、責任を果たすために
税を徴収出来ると考えている。

実際は、建前に成り下がり私服を肥やす貴族が大半の中イザベラは、真面目に取り組んでいた。

「諸君！決闘だ！」

「あれは？」

「…ギーシュ。土のドット」

いつのまにか、隣にいたシャルロットが教える。

「武器が無ければ、小市民と変わりありません」

「まずいわね」

「えぇ」

ギーシュは、杖の造花を振りゴーレムを錬金し決闘は始まった。

第四話　ヴァスト広場の決闘

決闘が始まった。サイトは魔法に驚きゴーレムに殴り飛ばされる。

（ファンタジーな世界なんだから警戒しろよ）

「言い忘れたが、僕の二つ名は青銅。ワルキューレがお相手するよ」

ルイズが喚いているが関係なくサイトを殴りつけるワルキューレ。

「サイト！もういい寝てろ！」

「…まだ俺は、平気だっつうの！」

「っち。馬鹿が！イザベラ様手助けしていいですか？」

「問題にならないようにね」

「おい！相手は丸腰だぞ！ハンデを付けたらどうなんだ？」

サイトの能力をみたいユウ達にとっては、このまま終わって欲しく無かった。

また、魔法を使い一方的にな戦いに周りの目が気になり出した、ギーシュにとっては都合がいい申し出でもあった。

「いいだろう！弱いものイジメは、僕の趣味じゃないからね！」

ユウは、シュバリエの称号を貰っているし、マントも着ていたので貴族と思われている。

ユウは、地下水を取り出した。

「久しぶりに戦闘に使ってくれるのよ？相棒！」

「いや。叩きのめしたいがな」

地下水は、戦闘を希望していたが、ユウは剣を錬金してサイトに前に投げる。

「っな！」

地球に居たはずのユウが魔法を使いサイトは驚いているが、ユウは気にしないでサイトに話し掛ける。

「サイト立てるか？」

「朝比奈先輩？」

「後は、彼がお相手しよう」

「勝手な事しないで！私の使い魔を殺すつもりなの！！」

（何が使い魔だ。お前が欲しいのは、使い魔という奴隷だろ！）

ユウは、心の中で悪態を吐き捨てる

ユウは、何回かルイズがサイトを殴るのを見ているし言動を聞いて

いた。

「絶対だめなんだから！主人の命令を聞きなさい！使い魔のくせに！」

ヒステリックに叫んでいるが、サイトは剣をとった。

「馬鹿犬～」

（犬扱いかサイト不幸だな）

所変わって学院長室

「なんと！あの少年が、ガンダールヴじゃと」

「はい。間違いなくガンダールヴのルーンです」

コルベールが興奮した様子で話している所に、秘書のロングビルが入って来た。

「大変です。ミスタ・ギーシュとミス・ヴァリエールの使い魔が決闘を」

「全く暇をもてあました貴族は、たちが悪いわい」

「教師達が、眠りの鐘の使用を求めています」

「子供のけんかじゃ！放っておきなさい」

「わかりました」

ロングビルが退室するとオスマンは、杖を振り鏡にベストリ広場を写す。

「あの少年が、ガンダールヴが確かめるとするかのぉ」

「はい」

再びベストリ広場

サイトが剣を取ると、水を得た魚の様に素早く動き出した。

「こんなトロい奴に！」

サイトは、横に剣を振るいワルキューレを真っ二つに切り裂いた。

崩れ落ちるワルキューレを見てギーシュは、パニックを起こしていた。

「わ、ワルキューレ！」

作り出せるだけワルキューレを作りサイトに向ける。

だが、取り囲んだワルキューレをサイトは一気に潰す。

一瞬にして五体のワルキューレは、切り刻まれる。

「早い！」

「振る剣が見えないわ」

盾に置いたワルキューレが倒され、ギューシュは降参した。

「まだやるか？」

「ま、参った」

ギューシュは、腰をつきうなだれている。

学院長室

「あの少年、勝ってしまいましたね」

「…うむ」

「では、彼が」

「間違いなく、ガンダールヴじゃな」

ヴェルストリ広場

「何やってんのよ！この馬鹿犬！」

「でも…」

「主人の命令を無視してどういうつもりなの！」

ルイズは、サイトを殴りつけるとさっさと帰っていった。

（メイジを倒す平民なんて危険分子じゃない！それに、あの馬鹿犬は主人の命令を無視して、貴族を何だと思ってるのよ！）

サイトが、異世界から来た事を知らないルイズにサイトの価値観はわからないし、サイトもルイズの価値観をわかるはずがなかった。

ルイズにとって幸いだったのがサイトが従順な戦後の日本人だった事だろう。

第五話　サンゴンの夜

決闘の後、野次馬がさりギーシュがサイトに声をかける。

「すまなかった。君の事を誤解していたようだ」

「そんな事より、シエスタに謝っておけよ」

「あぁわかったよ。君は、勇者だな」

ギーシュは、見栄張りな為建前を大事にするし、軍人の家系なので国土と国民を守る事を教え込まれていた。

彼がノブリス・オブリージュに目覚める日は近いかもしれない。

イザベラ達は、部屋に戻っていた。

「ただの少年が剣を持っただけで最下級のドットとはいえ、メイジを倒すなんてね」

「味方にいれば心強いですが、敵に回ると厄介です」

「あら、彼とは友達じゃなかったの？」

「俺は、イザベラ様の味方ですよ。そして、彼はトリステイン側の人間です」

当たり前の様に言い切るユウに、イザベラは嬉しさ半分恐怖半分だった。

（…ユウ、利害が一致しなくなったら私も切り捨てるの？）

「それよりコルベールの件ですが、いかがなさいます？」

「そうねぇ…」

「潜入しますか？」

「いいわ。情報網の能力を試すわ」

この時イザベラは、ユウの使い過ぎを懸念を持ていた。

「確かに、いい機会ですが…いえ！では、ロンダリオに調査の依頼をしておきます」

ロンダリオは、独自に商会の情報網を持っており、今は生産と情報を一手に任されていた。

（まぁいいさ。実戦部隊は、俺に任されているし適材適所さ…）

ユウは、ロンダリオに嫉妬しつつ、伝令のガーゴイルをとばした。

その後、魔法学院では特に何も無く、サンゴンに帰る事になった。

生徒達の整列に見送られイザベラは、向かえの竜籠に乗っる。

ユウは、結局サイトには迷い込んだと伝え、魔法はマジックアイテムだとしか言わなかった。

その頃サンゴン村

「頑張れ！明日には、イザベラ様が帰ってこられる！」

「もぉ、駄目だ！」

「諦めるな！」

文官達が眠気と殺人的書類量と戦っていた。

チャッカリとノルマを定めていたイザベラだったが、凡人の文官達には過酷だった。

イザベラが仕事に復帰した時、文官達は涙を流して喜んだという。

帰還した翌日の夜、情報を持ったロンダリオが来た。

「現在、コルベール氏について確認出来た情報はこれだけです」

「詰まり、これしかわからなかっのかい？」

イザベラが、機嫌が悪そうな声で聞く。

「…はい」

「情報の扱いに長けているから、あんたに情報収穫を一手に任せたんだ。それなりの結果を見せてもらいたいね」

ロンダリオは、イザベラとよく交渉できたと内心思っていた。

本気になったイザベラの威厳は、相当のプレッシャーだ。

「魔法学院卒業後の経歴が不明です。未確認ですが、アカデミーの実験小隊にいたらしいとの情報も…」

イザベラの機嫌がどんどん悪くなっていく。それは、威厳のある有無を言わせぬ怒りのオーラだ。

「まぁいいわ、実験小隊について詳しく調べてきな」

「はい！」

ロンダリオは、慌てて情報収集の為に出ていく。

最近来なくなった、シャルロットを名指しした任務が来た事と、コルベールの情報が集まらないのだ。イザベラの機嫌は最高に悪くなっていた。

「ユウ！」

「はい！イザベラ様」

イザベラの本気モードを過去に見ているユウは、ビックとしながら

一気に直立不動の体制になる。

「一杯付き合いな！タルブで買ったワインがあるでしょ？」

「は？」

てっきり、トリステインに潜入しろと言われると思っていたので、肩透かしを喰らう。

「そういう気分なんだよ！」

貯蔵庫からワインとり、厨房からチーズと干し肉を盗む。

伊達に不正規戦部隊に居る訳じゃない、手際よく盗んでいく。

「っお！気が利くじゃないかい」

イザベラの私室に入るとイザベラは、パジャマだった。

（ちょっ！！パジャマですか？！この展開は、思春期の少年には、刺激的すぎます）

ユウの脳内は、パニックである。

「あぁ、厨房からちょっとな」

平静を装いつつ椅子に座る。

「ふふ、明日コックが五月蝿いわよ？」

悪戯をした子供みたいな笑顔のイザベラを見てユウは、顔を朱めた。
（やっぱりこうしてみると綺麗だよな。あれ？俺って…）
「まぁ、つまみ食いの醍醐味さ」
何とか返したが、ユウの脳内はエラーばかりである。
「じゃあ。乾杯」
暫くは、イザベラの愚痴を聞いていたが、イザベラがある質問をした。
「ねぇ…」
「ん？どうした？」
「私の使い魔をしていて後悔はない？」
「後悔なんてしてないさ！！イザベラは、理想の上司で、後たまに子供ぽくて…」
（あれ？俺何言って？俺は、…）
「後半は何よ！あんただってたまに、ポカしてるじゃない！」
向かいの席から隣にやってくて絡むイザベラ。
「イザベラ！お前酔うの早いって！」

「デートしたくて調査って名目で街まで行ってるのに！鈍感！」

「え！え！」

「他には、頭が回るくせに何でで気付いてくれないのよ！」

涙目で見上げるイザベラにユウは、ＫＯ寸前である。

（ツンデレ、涙目、上目目線だとぉ！そのコンボは反則です！）

ユウは、完全にパニックである。

（落ち着け！落ち着け俺！）

「イザベラ！悪かった！気付かなかった！」

「遅いわよ！鈍感！」

「俺、勘違いしてたよ！俺は、イザベラの事…」

「ＺＺＺ…」

「イザベラ？」

イザベラが、酒に弱く絡み上戸である事が判明した。

イザベラは、もう夢の中である。

「とりあえず、明日だ！うん！」

明日は、別の意味でギクシャクしそうである。

第六話　気付いた事

翌日の朝

「う～ん。頭痛い」

（昨日どうしたっけ？そうだ！ユウと…／／／）

「まずい！！」

とりあえず、身嗜みを整えて食堂にいく。

イザベラは、使用人を最低限しか使っていない。

食堂に行くとすでに、ワーレン・ルッツ・ユウが揃っていた。

「「「おはようございます。イザベラ様」」」

「おはよう」

やはり、昨日の事もあり二人の間に気まずい空気が漂っている。

「今日のご予定は…」

スケジュール管理は、ワーレンの仕事であり、報告を聞きながら、朝食を食べるのがイザベラの日課だ。

「顔色が優れないようですが？」

「っえ？あぁ、たいしたことない無いわ」

「旅の疲れがでたのでは？今日は、予定を変更しておきます」

ユウだけが、イザベラの体調不調の理由をしっている。

「えぇ、よろしく」

「はい」

イザベラが食べ終わり、逃げるように部屋に戻った。

「はぁ～」

ユウは、ため息をついてこれからの事を考えていた。

「どうしたんだい？」

「ちょっと悩み事がな」

「僕でよかったら相談にのるよ？」

ユウとルッツは、歳も近く結構仲良くしている。

「いや。答えは、出てるんだが…」

「それならいいけど、あんまり考え過ぎない方がいいよ」

「あぁ」

（はぁ～。取りあえず、仕事を終わらせないと）

ルッツは、最近見習い騎士から騎士に昇格し、諸侯軍の訓練にも参加している。

諸侯軍は午前中は基礎体力訓練を、ユウとルッツに手隙の教官達は戦術研究会と図上演習をしている。

「目標制圧ならず！敗北判定！！」

「っち！」

今は、リュティミスの地図を使った図上演習が行われていた。

「やっぱ駄目かぁ。条件が厳しすぎないか？」

「…」

ジルは、ユウに話し掛けるが返事はない。

「おい！」

「あぁ、どうした？」

ジルから見ても、今日のユウは魂が抜けていた。

「なんかあったのか？」

「…いや別に」

「はぁ。午後は、気をつけろよ！」

午後は、主に射撃に銃の整備や体術に銃剣術の訓練を行う。

生産量が増えたといえ、一人数発の訓練では、どうしようもない。

［工場の新設で月産１５００発から、７５００発に増産の予定］

今は、マスケット銃でお茶を濁しているのが現状だ。

狙撃手は、適正テストで技能優秀の者から選ばれて、優先的に九九式短小銃を使っていた。

後に、狙撃手養成学校が創設されるが、今の時点では付け焼き刃の状態だった。

「…集中しないとな」

ユウは、狙撃手の訓練に参加している。

これは、ガンダールヴの能力とサバゲーで培ったノウハウを教える為である。

「しかし、これ呼びにくいぜ」

「はぁ？」

カルロスが九九式短小銃を持って言う。

「俺は、この名前好きなんだがな」

「たが、長すぎだろ！」

「たしかに」

ジルとルッツも加わり仕方なく名称について考えるユウ。

（ハルケギアの人にしたら変な名前なのかな？仕方ないイザベラに相談しよう）

午後の射撃訓練も普段より悪く心配されたユウだった。

夜は、文字や基本戦術の教育があるが、ユウはジル達に任せサンゴンに帰る。

サンゴン村に帰り、イザベラの私室に向かう。

コン・コン

「入っていいわよ」

「失礼します」

部屋に入ると、イザベラはベットで書類の整理をしていた。

「ユウ！／／／」

イザベラは、昨日の事を思い出して顔を朱めている。

「あの…」

（まさか？！告白？）

「九九式短小銃の名称ですが…」

イザベラは、がっかりして話しが耳に入っていなかった。

「…任せるわ」

「それから、昨日の事ですが…」

（な、何！ユウは、私の事どう思ってるの？）

イザベラは、期待と不安で一杯だった。

「俺、今まで勘違いしてたよ！」

「っえ？」

「今まで、忠誠心だと思ってたけど、俺はイザベラの事…」

（ま、まさか…）

俯き、顔を朱めているユウにイザベラは、もう幸せ一杯だ。

「俺、イザベラの事が好きなんだって気付いたんだ！」

「…ユウ」

二人が寄り添い、キスをしようとした時

コン・コン

「イザベラ様、至急決算して頂きたい書類が…」

ワーレンが書類を持ってやってきた。

「わかったわ！」

「…」

イザベラは、書類にサインをしてワーレンにわたす。

ワーレンが退室するとイザベラは笑って。

「よし、ユウ一杯飲むわよ」

「あぁ」

（…イザベラ、自分の酒の弱さを自覚してくれ）

ユウは、心の中でツッコミつつワインを取りにいく。

（あぁいう所が可愛いだよな…）

ワーレンと文官達は、明日も苦労しそうである。

第七話　アルデルの森

翌日、やっぱり二日酔いのイザベラだが、今日は仕事に参加していた。

「今回の任務は、翼人の討伐だよ」

「…了解」

任務のため、シャルロットはわざわざ、トリステインからガリアに呼び戻されて来た。

「全く、翼人が居るからゲルマニアが来ないってのに」

ガリアとゲルマニアの国境沿いに広がるアルデルの森。

良質な木材が採れるこの森の領有権を巡り、両国は対立している。

しかし、この森に住んでいる翼人が、ゲルマニアの侵攻の阻害になっており、目立った衝突は起こっていない。

「…」

「まぁ、任務が来た以上遂行しないとねぇ」

イザベラは、任務の依頼主に呆れ返っているようだった。

団長補佐に就いているユウがイザベラの代わりに任務を告げる。

「今回の任務は、村人と翼人の対立の原因を探り出し、対立を解消する事！以上！」

翼人は比較的温厚な種族たが、自分達のテリトリーを侵す者にはきびしい。

「今回の任務は、私もいくよ！」

「っな！」

ユウは驚いているが、シャルロットも顔には出ていないが驚いているようだ。

「なにも、イザベラが行かなくても！」

「交渉が第一目的、武力行使は最終手段違う？」

「はぁ～。じゃあ、俺達が先遣隊として原因を調査して、交渉可能ならイザベラを呼ぶから」

こうなったイザベラは、結構頑固だ。ユウは、半分諦め妥協案を出した。

「仕方ないわねぇ」

ユウと恋人なれて心に余裕ができたし、たまに子供ぽくなるが基本的に合理主義だ。

シャルロットが出発の準備に出かけるとイザベラはユウを呼び止めた。

「翼人は温厚だけど、自分のテリトリーを侵す者にはきびしいから…」

イザベラは、顔を朱めて上目線でユウを見つめている。

ユウは、イザベラの肩を掴んでキスをした。

「…あ」

「武力行使は最後の手段だし、地下水もいるから大丈夫さ」

それでも、イザベラは心配そうだ。何しろ、翼人やエルフが使う先住魔法は、強力で並のメイジでは歯が立たないとメイジ達には認識されている。

「気をつけてね」

「あぁ、じゃあ行ってくるよ」

ユウがイザベラと一緒にいて、わかった事は合理主義で仕事にはストイックで以外とロマンチストだという事だ。

ユウは、イザベラに別れを告げてシャルロットの後を追った。

エギンハイム村

「なぁ？本当に大丈夫なのかよ？」

「なあに、羽を傷つけりゃいいんだ。落しさえすりゃ俺達が止めをさしてやる」

心配そんな顔で言う猟師を余所に、サムは斧を軽々と扱いながら言った。

「けど、奴らは魔法を使うんだろ？」

「なあに、これだけ頭数が居れば大丈夫だ！」

サムの周りには、屈強なキコリ３０人に猟師が２０人いた。

ちょっとした傭兵団なら相手に出来る集団であった。

村人達は、周りを見渡してほっとしたような顔になり、あちこちから余裕の笑みが漏れた。

サムは、傍にあった岩を持ち上げて、辺りで一番大きなライカ欅に向かって岩を投げた。

揺れた巨木から、翼人が現れる。

「今だ！やれ！！」

猟師達は矢を放つが、翼人達の周りの空気が陽炎のように、ゆがみ矢は明後日の方向に飛んでいった。

「ひぃいい！魔法だ！」

「森の悪魔の先住の魔法だ！」
猟師達は、逃げ出したが残ったいかつい男達が翼人を目掛け襲い掛かる。
その頃上空では
「きゅいきゅい！誰かが精霊の魔法を使ってるのね！」
「…」
シャルロットは、黙って飛び降りた。
「なぁ？相棒は、行かないのか？」
「この高さだぞ！？さすがに、びびるわ！」
「嬢ちゃんに何かあったら、どやされるぜ」
「はぁ～宮仕えは辛いってか」
少し遅れてユウも飛び降りた。

第八話　翼人

サム達は、斧を振りかざし翼人に襲い掛かる。

「我らが契約したる枝はしなりて伸びて我に仇なす輩の自由を奪わん」

呪文と言うより起こる現象を読み上げる、といったほうが近い。

サム達は、あっさりと伸びて来た枝に囚われた。

サムは、己の迂闊さを悔やんだ。

（やはり、魔法が使えぬ自分達では…）

一人の翼人が、呪文を口ずさみながらサム達に手を振り下ろした。

「枯れし葉は、契約に基づき水に代わる力を得て刃と化す」

落ち葉が舞い上がり、鉄片の様になった葉が、サム達に目掛けて飛んだ。

サムが諦め目をつむった瞬間雪風が吹いた。

散弾のような氷の粒を含んだ風にサム達に飛んだ葉を吹き飛ばす。

翼人達が、顔をあげると空から落ちてくるシャルロットの姿があった。

翼人は、シャルロットに狙いを切り替えた。

シャルロットは、杖を振りルーンを口ずさむ。

ふわん！と落下の軌道を変えた。シャルロットがたどるはずだった空間を葉の刃を通り過ぎる。

しかし、フライの呪文で飛んでいる間は他の魔法は使えない。シャルロットは、翼人の攻撃を避けながら地面に降り立つ。

「我らが契約したる枝はしなりて伸びて仇なす輩の自由を奪わん」

「自由を奪わん」

先程サム達を囚えたように、何本もの枝がシャルロットに向かってくる。

今度は、横からエア・カッターに薙ぎ払われた。

「俺が食い止めるから、そっちは村人を！」

ユウが地下水とワルサーを構えシャルロットに叫ぶ。

その時、悲鳴のような声が響いた。

「やめて！あなたたち！森との契約をそんな事に使わないで！！」

「アイーシャさま！」

そこにいた者すべてが、上を見上げた。

長い亜麻色の髪が美しい翼人が、上からゆっくりと降りてくる。

「…まるで天使だな」

思わず、そう呟いてしまうほどにそれは、なんとも美しく神秘的な光景だった。

（まぁ、とりあえず戦闘にならないだろう）

地下水を懐にしまおうとした時、ユウ達と翼人達の間に一人の村人が割って入った。

「ひいて！ひきなさい！争ってはなりません！」

アイーシャの叫びに戸惑いながら翼人達は去っていった。

間に入った村人、ヨシアの目はアイーシャに吸い付いている。

アイーシャもヨシアを見つめ返し、悲しそうに顔を伏せた。

シャルロットに解放されて、事の成り行きを見ていたサムが我に帰りシャルロットに駆け寄った。

「も、もしかしてお城の騎士様で？」

シャルロットは、頷いて短く自分の地位と名前を述べる。

「ガリア花壇騎士、タバサ」

村人から歓声が沸いた。

「みんな！騎士様だ！」

「お城から花壇騎士様がいらしたぞ！」

それからサムは、間に入ったヨシアを殴りとばした。

「この罰当たりが！魔法の邪魔をするたあなんてことだ！」

倒れたヨシアは、悲しそうに顔を伏せた。

「じゃあ騎士様。ちゃっちゃと連中をやっつけてくださいな」

揉み手をせんばかりの勢いで、サムがシャルロット達ににじり寄る。

シャルロットは、ぼーっと立ち尽くし動かない。

そして、抑揚のない声でつぶやいた。

「…空腹」

二人は村に案内され、一番いい部屋に通された。

「すっかり諦めておりましたが…。いや、来てくれて助かりました」

村長がペコペコと頭を下げる。

シャルロットは、気にせずに目の前のご馳走を食べている。

（つーか、何処にそんなに入るんだ？精神力を使うと腹がへるのか？いや、イザベラはこんなに食べないし…）

シャルロットの遠慮の無い食べっぷりに軽く現実逃避しつつ、これからの事を考える。

（まぁ、あのアイーシャとかいう翼人なら話しが通じそうだしな…。問題は村人達か）

第九話　ヨシアとアイーシャ（前書き）

試験で更新が遅くなりました。誤字に気をつけて書いていきたいと思います。

第九話　ヨシアとアイーシャ

ユウは、これからの事を考えていた。

翼人を工場近くの森に移住させて、森の警備をしてほしかった。

北花壇騎士団員は、普段は工場の詰め所にいる。

表だった爵位は与えられていないが、シュバリエ並の給金と任務手当で、そこら辺の下級貴族より金持ちである。

それに、給食はイザベラが雇ったコック達が作っており質・量ともかなりの物である。

更に、サンゴンの娯楽施設等の高待遇で脱走や裏切り者は出ていない。

付近の森を翼人が警戒してくれれば、かなり巡回や警備が楽になる。

「あのぉ？お口にあいませんでしたか」

「あぁ、ちょっと考え事をな」

村人達は、二人に怯えぱなしだ。メイジは、魔法を使いハルケギニアの支配層として王族・貴族として君臨している。

魔法を使えない平民は、メイジに逆らえ無い。例え、平民を殺しても罰する法が無い。

貴族の気まぐれや、交通事故が死因の二割を占めている。

平民にとって貴族・メイジは、恐怖の象徴になっている。

「あぁ、美味しいよ」

（取りあえず、村人に警戒体制を解いてもらわないとな）

笑顔で答えるが、逆に怯えられてしまい軽くへこむユウだった。

（まぁ、間に入ったあの優男。翼人と何か関係がありそうだが、その辺りから探ってみるか）

ユウが基本方針をたて食事をしようとすると、いきなり窓が割れ、青い鱗の風韻竜が首を突っ込み抗議の声をあげた。

「ごはんずるい！シルフィードもお腹すいた！きゅいきゅいきゅい！」

（バカ！喋るなよ、お前が韻竜ってのは秘密だろうが！）

ユウは、ちょっと焦りながら心の中でツッコミをいれるが、シャルロットは無表情のまま食事を食べながら『そういえば、ご飯あげるのわすれてた』と暢気に考えていた。

「ぎゃあぁぁ！竜だ！」

「竜が、竜が喋った！」

パニックを起こす村人達に気付き、シルフィードは『しまった』と思い、ペロっと舌を出す。

本人は可愛い仕草のつもりだろうが、牙をむき出しにした竜は、恐怖以外の何物でもない。

「いやぁぁ！た、食べないでぇぇ！」

「お、俺は、美味しくないぞぉぉ！」

更にパニックに陥る村人達に、シャルロットがシルフィードを指差しガーゴイルと呟く。

「へ？ガーゴイル？」

「な、なんだ！そうだったんですかい！あっはっは…」

村人達は慌てた自分達が恥ずかしく、照れ隠しに笑い始めた。

そんな、和気藹々とした雰囲気の中、サムがヨシアの首根っこを掴んで部屋に入り、二人の前にヨシアを突き出した。

「さっきはこの野郎が大変失礼を…。煮るなり焼くなり、好きにしてくだせえ」

村人達も、ヨシアに冷たい目線を向けている。

シャルロットは首を横に振り、ユウも『別に構わない』と言った。

すると、ほっとした顔でサムがヨシアを小突きながら、縄をほどく。

「よかったな！優しい騎士様達に感謝しろ！殺されても文句は言え

ないんだぞ！わかったか！」

しかし、ヨシアは、唇を噛むばかり。

そんな弟の様子で何かを察したのか。

「お前、まさかまだあの翼人と…」

村人達がひそひそと、噂し始めた。

「まさか、ヨシアと翼人の娘が…」

「村の恥だよ…」

「おい、どうなんだ？ヨシア！」

サムが怒鳴る。ヨシアは立ち上がると、部屋を駆け出ていってしまった。

（ふ～ん。成る程、そういう事か…。しかし、本当に暮らしが立ち行かなくなるのか？食事も割といいものを使ってるし）

その夜、イザベラにエギンハイム村の資料を照会する為に連絡用のガーゴイルを飛ばす。

「翼人とは、交渉の余地有り。交渉は、こちらで可能…。よし、行け！」

飛んでいくガーゴイルを見送り、部屋に戻る途中で、キョロキョロしながら森の方にいく人影を見つけた。

「ん？あれは…」

それは昼間、翼人との間に割って入ったヨシアだった。

第十話　深夜の密会

ヨシアを尾けて森に入って行く。

（たしか、アイーシャだったかな？気が引けるが仕方ない）

二人の関係を聞いていたので気まずかった。

森に入り暫くすると、アイーシャが現れた。

（やっぱり、気まずいよな）

気まずいが、情報を集めないといけないので、地下水を取り出し魔法を使う。

風の魔法で集音し、会話を聞き取ろうとすると、背後に音が聞こえた。

「え？シャルロット？」

「…後ろ姿が見えた」

「シルフィードは？」

「…五月蝿いから眠らせた」

「そ、そうか…」

（容赦ねぇ。確かに、あれは五月蝿いがな…）

二人の会話に聞き耳を立てる。

「…どうして！」

「私達の氏族…、あの木から去ることにしたの」

「そんな！だって君達は子育ての季節だろ？他の木じゃ、大きな巣がはれないじゃないか！」

「精霊の力を、争いに使うくらいなら、増えなくていい」

「俺が皆を説得する。だから…」

（翼人が出ていくなら任務は終了…。まぁ、後味悪いがな）

「…交渉はいいの？」

シャルロットが話しかけてくる。翼人の協力は欲しいが、翼人にも都合がある。

（交渉か。確かに、どこか森の奥に行かれると手が出せなくなる。用は、村と翼人達が協力できる様にすればいい。ならば…）

ユウが、何か思い付いたのか、ニヤリと口端を吊り上げる。

「我に秘策有り」

「…どうするの？」

「村を盗賊に襲わせて、翼人に追い払わせる」

「…そんな事で？」

シャルロットは、ユウの案に懐疑的なようだ。

「村人だけでは不可能だが、翼人と協力すれば可能ということを解らせればいい」

シャルロットは、少し考えて口を開いた。

「……なら、もっといい方法がある」

「本当か？」

シャルロットは、ユウの真似をして言った。

「…我に秘策有り」

（こ、怖い…。ってか以外とノリノリ？！）

シャルロットは、立ち上がりヨシア達に向かう。

いきなり現れた二人に驚いたが、ヨシアがアイーシャの前に立ち塞がる。

「お願いです！騎士様！どうか、翼人達に危害を加えるのをやめてください」

「……」

シャルロットは、答えない。

「別に、あのライカ欅を生活出来るんだ！ただ、あの欅は高く売れそうだからって…。翼人のせいでおまんま食い上げなんて大嘘だよ」

ヨシアは二人に必死に訴えるが、既に二人の方針は決まっていたが、あえて難色を示す。

「って言ってもなぁ。こっちも任務だ」

ユウの思惑は、アイーシャ達を焦らしてギリギリの譲歩案を引き出し、交渉を優位に進める。

「君達は、子供だからわからないんだ！人を愛するって事がどういうことか！」

ユウ達は、ポーカーフェイスで顔を変えずに、ただ聞くだけだった。

「お願いです！どうかお引き取り下さい」

「無理」

シャルロットが短く答える。

ヨシアの顔がゆがんだ。

「そんな！貴族には、心というものがないのか？こんなに頼んでも！」

ヨシアが絶叫したその時、ユウが話しかける。
「なぁ？お前、王宮がどんな所かしってるか？」
「っえ？」
「綺麗な所さ。たが、それ故に汚い」
ヨシアは訳が解らないようで、キョトンとしている。
「傷口があれば、皆そこに群がり権力を奪わんとする」
「それと、これに何の関係が？」
ヨシアは、まだ解らないようだ。
「お前達二人が助かるかわりに、俺の主は権力を奪われる事になる」
「っぐ」
「それだけの危険を犯すんだ。当然、それに見合う成果がいる」
ヨシアは俯いているが、アイーシャは違った。一応は上に立つ物、ユウ達の意図を見抜いていたようだ。
「貴方達は私達に何を求めているの？」
アイーシャは、ユウ達に問い掛ける。
「話しが分かて助かる。俺の主が交渉したがってる。話しはそちら

で」

「わかったわ。でも、私達は離れたくない」

アイーシャは、心配そうにヨシアを見つめて言う。

「その件に関しては、手がある」

四人は、集まって話し始めた。

第十一話　暴走ガーゴイル？

「そんな事で？」

ヨシアは驚いた。貴族がそこまで自分達の事を考えていたことに。

だが、そんな事で村人が翼人を受け入れるのか、疑問だった。

「大丈夫」

「まぁ、確かに俺の案よりいいかもな」

ユウの案と内容は似ているが、シャルロットの案の方がよりベターに思えた。

盗賊役の北花壇騎士団員達を呼ぶのに時間がかかる。

更に、他の北花壇騎士団員を動かした事と、今回の事を結びつけ命令違反に気付く者がいないとも限らない。

「でも、他の人達は…」

「なら、他に何か案はあるのか？」

アイーシャは、乱暴な手段に不安のようだが、他に案もないようだ。

「無論、怪我人は出さないようにする」

「それなら…」

ヨシア達は、見詰め会い結論を出した。

「「お願いします」」

翌日…

村は騒然となった。

先日の襲撃に加わった猟師が、猟に出かけようとしてそれに出くわした。

「暴走ガーゴイルだって？」

暴走ガーゴイルは、ガーゴイルの疑似意思が何らかの理由で狂ってしまった状態を指す。

こうなると、作成した本人にも制御できなるなるので一大事である。

「おなかすいたのー！おなかー！」

と喚きながら、ブハッ！とブレスを吐いた。

小さなブレスだが、村人を驚かすには十分だった。

シルフィードは広場で暴れ狂い、井戸のつるべを破壊した。

「おなかすいたのー！おにくー！」

更に喚きながら暴れるシルフィードに、村人は成す術もなく遠くから見つめるしかなかった。

こうなっては翼人どころの騒ぎではない。竜に家を焼かれ、住む村がなくなってしまう。

村人はあわてて、シャルロットのいる部屋へと向かった。

「騎士様！騎士様のガーゴイルが大変な事になっています！」

シャルロットは顔をあげて、重々しい口調でいった。

「共のガーゴイルが暴走するなど、武人として恥の極み」

「お願いします！早く何とかして下さい」

「精神統一、一呪入魂、仇敵殲滅、雪風魔法」

シャルロットは、怪しい呪文を呟きながら、階下へ降りていく。

村人達は、とりあえず安心した。

（この騎士様の発する呪文は、なんとなく強そうだ）

「静まれ！ガーゴイル！」

「うるさい！おなかすいたのー！ごはんー！」

シルフィードがシャルロットめがけてブレスをはいた。
シャルロットが魔法を使いブレスの炎を散らす。
「最強呪文！風棍棒！」
エア・ハンマーがシルフィードに襲い掛かる。
「いたい！なんで本当　に当てるのー？！」
シルフィードの目から涙がこぼれる。
泣いた！ガーゴイルが泣いた！とどよめきが起こる。
その時、別の所からエア・ハンマーが飛んできた。
「はぁ、まったく」
今回は危険はないし、シャルロットがノリノリなので、ユウは傍観するつもりだったが、村人に見つかって連れてこられた。
「やるしかないか。…助太刀いたす」
（舞台を壊さないようにテンションあげてくか）
エア・ハンマーにエア・カッター、ウィンディ・アイシクル等の攻撃魔法の波状攻撃がガーゴイルの振りをしたシルフィードに襲い掛かる。
シャルロットは、約束を忘れて人前で喋ったシルフィードに怒っていたのか、どんどん魔法を放っていく。

そうなると、ユウも合わせざるを得ない。
下手に攻撃を緩めて各個撃破の対象にされたくないし、例え半不死身といえ痛い思いはしたくなかった。
「ひどいのねー！」
たまらずシルフィードは空に逃げた。
「飛んだ！飛びましたよ！」
村人達が叫ぶ。シャルロットは頷きフライを使う。
「騎士とて飛ぶ。飛ぶ騎士である」
そう言うと、シルフィードを追いかけていく。
「あのぉ？騎士様はいかないんですか？」
追いかけなかったユウに村人がたずねる。
「だって…フライ使うと他の魔法使えないから」
「っえ？」
そうしているうちに、シルフィードのタックルを喰らいシャルロットがヨロヨロと地面に落ちていった。
（さて、どうするかな）

ユウが考えていると、

「うわー！また来た！」

「え？」

シルフィードがユウの前に降り立つ。

「ちょ…やば！」

シルフィードの尻尾で凪ぎ払われる。

咄嗟に飛んで衝撃を分散させる。おかげでかなり派手に吹っ飛ばされた。

（ちょ…俺には手加減なしかよ！）

ユウは、突っ込んだ家の中でシルフィードに悪態をつく。

（アバラ逝っちまったな）

「おいおい、大丈夫かよ？」

持っている地下水が話しかけてくる。

ガンダールヴの能力のおかげで痛みはそこまでなかったが、ユウは不思議なものを見た。

空気中に光が漂いそれが怪我をした所に集まって行く。

光が精霊なのかは解らなかったが、傷が治ったのは解った。

「おい！大丈夫かよ相棒？」

ユウが返事を返さないので、地下水が怒鳴っている。

「あぁ、治った」

「はぁ？何言ってんだ？」

長年生きてきた地下水にも訳がわからなかった。

「どういう…」

「しぃー黙ってろ」

村人がユウの下にやって来たので、会話を打ち切った。

「騎士様！大丈夫ですか？」

「無念…カク」

ユウは、狸寝入りを決め込んだ。

「騎士様がやられた！」

「もう、だめだー！」

シルフィードを前に、逃げろ！と叫ぶ。

しかし、何処に逃げろというのか？生活基盤を捨てて生きていけるはずがない。

「こうなったら村と一緒に死ぬしかねぇ！」

サムが叫ぶ。そこへ、シャルロットがフラフラと現れた。

「騎士様、大丈夫ですか？」

「ふ、不覚…かたじけない」

緊迫感のない『かたじけない』であったが、誰も気がつかない。

「あのガーゴイルには、弱点はないんですか？」

「足の裏に矢がささってる…。踏んづけたみたい…。あれを抜けば正常に…、ガク」

「騎士様ー！」

けど、どうやって？騎士だって近づけなかった空飛ぶガーゴイルに近づくんだ…。

再び、村人達に絶望感が漂う。

「罰が当たったんだ！」

ヨシアが一人立ち上がり叫ぶ。

「これでわかっただろう？すむ場所を追い出されるってことが！」

「うるせぇ！それとこれとは、話しは別だ！」

「別じゃないよ！協力しあうって選択肢もあったはずさ！協力すれば、あんなガーゴイルなんて」

「どうやって！」

「こうするんだ！」

ヨシアが叫ぶと、アイーシャが茂みから出てきた。

第十二話　和解

「てめぇ…、やっぱりその鳥もどきと」

サムは怒りに顔を歪ませて、ヨシアの腕をつかんだ。

「今は、そんなこと言ってる場合じゃないよ！僕たちに任せて！」

アイーシャはヨシアを抱えて飛び立つが、やっと飛んでいる感じでフラフラだ。

「そんなんじゃ、おとされちまうだろ！」

サムは顔を青くして、つぶやく。

シルフィードが、ヨシア達に狙いを定めた。

その時、茂みから一斉に翼人達が十人ほど舞い上がった。

「矢を射かけて、ガーゴイルの注意をひいて！」

猟師達が我に返り、矢を放ち始める。

翼人達は、シルフィードの周りを幻惑するかのように飛んだ。

「わあ！わあ！なんなのもー！」

シルフィードは叫びながら暴れる。

「お前達邪魔なのー！」

シルフィードが足を突き出し、鷲の様に襲い掛かる。

苛烈な攻撃魔法と、周りを挑発するかの様に飛ぶ翼人にイライラしていたのか、加減を誤りアイーシャを突き飛ばしてしまう。

「アイーシャ！！」

ヨシアが叫ぶ。

「レビテーション」

寝た振りをしていた、ユウが魔法をかけて間一髪で事なきを得た。

「騎士様！」

（あーぁ、こんなの予定外だぞ）

「うぅ…」

アイーシャを診るが目立った外傷は無い。

「気絶しているだけだ」

その答えに安堵の表情を浮かべる村人達。

（こりゃ、成功したかな）

ヨシアもシルフィードから矢を抜き、他の翼人に抱えられ降りてき

た。

ヨシアが駆け寄り、目を醒ましたアイーシャと抱き合い村は歓声に包まれた。

三日後…。

村は陽気な騒ぎに包まれていた。

村人達は考えを改め、翼人と和解した。

しかし、これから異なる文化や生活習慣、無理解から対立する事もあるだろう。

だが、この村には二つの種の間に微笑ましいカップルがいる。

翼人が人間社会に受け入れられるにはまだまだ時間が掛かる。

翼人がガリアで人間に受け入れられるには、第二次ハルケギニア大戦を待たなければならない、しかしこの村は大丈夫そうだ。

交渉の日時を打ち合わせて村を離れる。

アイーシャとヨシアが追いかけてきた。二人は、ありがとう！と叫んだ。

シャルロットは、任務と短く答えるだけだった。

サンゴン村

サンゴンは、各施設の建設も終わり最早、町と言ってもいいようになっていた。

「…以上が、エギンハイム村での報告です」

ユウはイザベラに報告を終えて、これからの事をたずねる。

「これからの事だが…」

「ユウにはトリステインに行ってもらうわ」

「コルベール氏のことだな？」

「私は、シーズンだからプチ・トロワに戻るわ」

この時期は、社交界のシーズンで招待状もいくつか来ていた。

「その間にか、しかし俺は顔がわれてるぜ？」

「経歴は用意したわ。顔を変えるマジックアイテムもね」

「なるほど。しかし急だな」

「時間がないのよ…」

イザベラは、いくらか焦っている様に見えた。

「どうしたんだ？」

「王宮内に不穏な動きがあるそうよ。それに、アルビオンの事もある」

「何か動きが？」

「レキシントンにて、王党派が大敗したわ。内乱はじき終わる、貴族派の勝利でね」

「次は、トリステインって事か」

アルビオンは、現在内乱状態にある。

原因は経済の悪化、元々アルビオンは浮遊大陸故に高度が高く、農耕に適していない。

食糧自給率は低く、輸入に頼っている。白磁の陶器や毛織物で外貨を稼いでいた。

しかし職人をゲルマニアに奪われ、ロード大公を粛清した事による不満、近年の不作による小麦の値段の上昇により財政が破綻して、一気に不満が爆発した。

ユウは納得していたが、イザベラは微かな違和感を感じていた。それが何かは解らなかったが、とりあえず情報収支を強化するしかなかった。

「その前にまた任務よ。今度こそ私もいくわ」

「はぁ、危ない事は止めてくれ、トップがそれじゃ部下が苦労する」

「今回は、私の専門分野だからね」

イザベラは、悪戯が成功した子供の様に笑っていた。

第十三話　ラグドリアン湖

今回の任務は、ラグドリアン湖の水位を増やす水の精霊を退治する事。

「でも、何でイザベラが行く必要があるんだ？」

「北花壇騎士団に水のメイジも、水の精霊を呼び出せるのもいないでしょう」

「まぁ、確かにそうだが…」

ユウが、知っている限り水の精霊を倒す方法は無い。

水の精霊自体が、マナが意識を持ったもので、不死身なのだから。

（不死身の者と戦っても最後は負ける。相手が神のような物なのだから）

方法は、呼び出して怒りを鎮めるか強力な攻撃魔法でダメージを与え一時的に封印するしかない。

「で、イザベラがよびだすわけね」

「そうよ、水の精霊を呼び出して怒りを鎮めるしかない」

「…鎮められなかったら？」

「死ぬわ、精神がね」

イザベラの本気の顔にそれが、嘘や誇張ではなく本当なのだと悟り、ユウは不安を抱かずにはいられなかった。

しかし、イザベラは結構楽観的だった。

（ラグドリアン湖の水の精霊のまたの名は誓約の精霊、その前でなされた誓約はたがえる事がないってね。キャー／／／／）

いや、終わった後の事しかいなかった。

翌日ラグドリアン湖に向けて出発するイザベラ御一行。

陣容は、イザベラ・ユウ・ワーレン・ルッツ・ジル・カルロス・オスカーの七人。

オスカーは、オルレアン派の一員で現在はサンゴンで経理担当をしているが、今回はリュティミス行き為同行している。

経理担当の為、イザベラの諸侯軍の装備とユウの秘密を知る一人である。

ルッツは、ユウとトリステイン魔法学園に潜入する予定。

カルロスは、トリステインの国内調査に万が一の時に脱出の手助け

をする任務を受けている。

しかし、その時トリステインからもラグドリアン湖を目指す者達がいることを知る者は誰もいなかった。

旧オルレアン邸で一泊して、夕方にシャルロットと合流しラグドリアン湖に向かう。

「…まって。誰かいる」

シャルロットが小声で言う。

風のメイジであるシャルロットは、空気の流れや気配を読む事に長けている。

「盗賊か？」

「…たぶん」

ユウは、地下水を取りだし襲撃に備える。

「人数は？」

「…四人」

何回かコンビを組んでいるので話しは速い。

「先に仕掛ける。俺とジルが前に出る、カルロスと師匠は援護をお願いします。シャルロットはイザベラについてくれ。残りは護衛を」

戦闘になった場合は団長補佐のユウに戦闘指揮が任されいたので、皆従い位置につく。

ユウは、右手に地下水を左手にワルサーを構えて前進する。

ジルも杖とリボルバーを構え続く。

カルロスは百式単機関銃を構えている。

リボルバーと百式単機関銃は、在庫処理で二人が使っている。

「なぁ、相棒。久々の出番だよな。殺っちまっていいよな。」

地下水は、久々の出番にはりきっている。

「あぁ」

風の魔法を使い集音し相手の位置を探る。

三十メイルまで近付いた時、相手が飛び出してきた。

（っく。速い）

相手が剣を振り降ろす。

シャオーン

透き通った金属音が響いた。

ユウが使ったのは、ガリアの護剣術。

接近戦に弱いメイジが剣撃に対抗するために編み出された、片手杖で相手の剣撃を受け流す技である。

独特の透き通った金属音で有名だったが、何故か廃れてしまった。

剣撃を受け流した後に、サイドステップで横に飛ぶと中衛にいたカルロスの百式短機関銃が火を吹いた。

相手も横に飛んでかわした。

（普通じゃねぇ。あり得ねえよ）

ジルがファイアー・ボールを放つが紙一重でよける。

「皆まて！お前サイトか？」

「なんだよ！先輩だのかよ！」

沈黙が場を支配する。

「ふーん。成る程ね、事情はわかったわ」

イザベラが前に出てサイトたちから事情をきいている。

（問題は、何で水の精霊が俺達が来るのを知っていたかだな。キナ臭くなってきやがった）

一人これからの事を考え込む。

「どうしたの」

シャルロットが尋ねてくる。

「水の精霊は俺達が今日やって来るのを知っていた。しかも、これはシャルロットを名指しの任務だった、となれば…」

「…誰かが水の精霊に教えた」

「おそらくな。キナ臭い話しじゃないか」

二人は黙り込む。そこに空気を読まずに陽気に話しかけてくる奴がいる。

「先輩達は、どうしてここに？」

「知らないのか？ラグドリアン湖の近くは、ガリア王家の直轄地なんだよ。水位が増えて被害がでてるんだ」

「ふーん」

（おいおいサイト、他に色々聞く事あるだろ？こいつが馬鹿でよかった）

「相棒って意外と腹黒いな」

地下水が話し掛けてくるが『そうか？』と軽く流される。

（後は、水の精霊と交渉だな。頼むからうまくいってくれよ）

第十四話　水の精霊

結局イザベラ達とサイト達は、翌日に水の精霊を呼び出す事になり解散した。

翌日…。

モンモランシーが水の精霊を呼び出した。

「水の精霊よ。もうあなたを襲う者はいなくなったわ。約束どおり、あなたの一部を頂戴」

モンモランシーがそう言うと、精霊の体の一部がはじけ、一行の元へ飛んできた。

ギーシュが慌てながら持っていた瓶で受け止めた。

すると再び水底に戻ろうとしたので、イザベラが呼び止めた。

「待って頂戴！一つ聞きたいんだけど？」

「なんだ？単なる者よ」

「なぜ、水かさを増やすのか聞かせてくれる。こちらとしては、や

めて欲しいんだけど。私達に出来る限りの事はするわ」

水の精霊は、ゆっくりと大きくなり様々なポーズをとる。その仕草は、人間のそれとは異なっている。もしかしたら、その動きが感情を表しているのかも知れなかった。

「お前達に任せてもよいものか、我は悩む。しかし、お前達は我との約束を守った。ならば、信用して話してもよいことと思う」

そして、水の精霊は語り始めた。

「数えるほどもおろかしいほど月が交差する時の間、我が守りし秘宝をお前達の同胞が盗んだのだ」

「秘宝？」

「そうだ。その秘宝が盗まれたのは、月が三十ほど交差する前の晩の事」

「ふふん。わかったわ。その秘宝を私達が返して挙げる、その秘宝の名前は？」

「アンドバリの指輪。我とともに、時を過ごした指輪」

（アンドバリの指輪？確か偽りの命を与えるマジックアイテムだたわね）

イザベラは、アンドバリの指輪の事を思い出しながら、他に何か手がかりはないか尋ねた。

「風の力を使いて、我の住処にやって来たのは、数個体。その中の個体の一人が、こう呼ばれていた。クロムウェルと」

（アルビオンの貴族派革命軍の司令官じゃない。おかしいと思ったわよ、不平や不満は有るでしょうが、たった一年で反乱軍が彼処までの規模になるなんて、噂じゃ直属の空軍まで突如裏切ったそうじゃない）

アルビオン内乱には、黒幕がいると確信しつつ、イザベラは水の精霊にアンドバリの指輪を取り返す事を約束し、水の精霊も水かさを増やすのを止める事を約束した。

「それで、いつまでに取り返えせば、いいのかしら？」

「お前達の寿命が尽きるででかなわぬ」

「気が長いのね」

「かまわぬ。我にとっては、明日も未来も変わらぬ」

そう言い残して、水の精霊はごぼごぼと姿を消した。

「結局手がかり無しじゃないかよ。クロムウェロったって人違いかもしれないし」

サイトは、当たり前の事を言っているが、情報を持っているイザベラ達にとっては、ほぼ間違いなくアンドバリの指輪はアルビオンにあると思っていた。

サイト達と別れオルレアン邸に戻る途中イザベラが話しかけてくる。

「ユウ？あなたはどう思う？」

「なぜ、水の精霊が俺達が来る事を知っていたか？」

「いえ、アンドバリの指輪よ。そっちは、私が王都で調べるわ」

「そうだな…。どっかの国がアンドバリの指輪を盗み、不満が溜まっているアルビオンの貴族派にテコ入れした。聖地奪還を掲げているから、単純に考えればロマニアだな…。」

「確かにね。そちらは、トリステインでコルベール氏の事を調べながら、情報を集めて頂戴」

「まぁ、何処の国も怪しいよな」

アルビオンで貴族派の勝利が確実なものとなり、アルビオン脅威論が高まる中で、各国の様々な利害が複雑に絡み合っていた。

トリステインは、アルビオン王家が倒れれば、家系が交わっているのは、アンリエッタ王女のみ。アルビオンの王位継承を主張出来な

い事もない。

ゲルマニアは、利害の一致で纏まった都市国家の集合体、この状況でトリステイン併合は困難である。

トリステインを併合すれば、トリステインが派閥を造り、逆に国を乗っ取られかねない。

そうなれば、トリステインは一気に衰退の途から脱して、ガリアをしのぐ強国になりえる。

だが、ゲルマニアも反抗的な大貴族を出来レースでつぶし、中央集権化を進めた上で、アルビオンとの戦争で疲弊したトリステインを併合するシナリオも考えられる。

ユウは、ゲルマニア・ロマニア・トリステインの順番で怪しいと思っていた。

その他の小国では、大した利権は勝ち取れないだろうし、ガリアは、ジョゼフ派とオルレアン派で纏まりを欠いており、今は内政に集中すると考えていた。

そう、まともな人間なら陰謀を巡らすより、内政に集中するだろう。

しかし、今のガリア王はまともな人間では無く、狂王なのだから。

はたして、この読み誤りが後にどのように影響するのか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1971h/

反逆のイザベラ 第二部開戦前夜

2010年10月13日17時48分発行